

公共図書館における電子書籍の所蔵傾向について

澤島 大佳

「電子書籍元年」と言われた 2010 年以降、電子書籍を取り巻く状況は変化している。電子書籍に関してはその将来性や現状など多くのことが調査されてきた。しかし、公共図書館が電子書籍を所蔵する際にどのような書籍が集められているか、その傾向を調査した研究はいまだされていない。そこで本研究では、公共図書館における電子書籍の収集傾向について以下の 2 つの観点から調査を実施した。

まず、日本十進分類法（以下 NDC）の分類に基づいて、各分類の電子書籍がどの程度の割合で所蔵されているかを調べた。また、印刷体書籍についても同様に調べ、電子体、印刷体の二つのデータを比較した。その結果、言語と文学の 2 つの分類においては、電子体の方が印刷体よりも割合的に多く所蔵されていることが分かった。文学は、印刷体よりも電子体の方が、他の分類と比べた際に、多く刊行されているからと考えられる。言語は、辞書機能や、音声機能など、電子体にしかない機能があるからであろう。また、どちらも同じ結果になったものとして、文学と社会科学の分野においては、それ以外のジャンルと比べて、所蔵割合は高かった。電子体、印刷体をそれぞれ割合順で並べると、文学と社会科学以外は異なる結果となり、NDC ジャンル別の所蔵割合で違いが見られる結果となった。

次に、電子書籍貸出サービスを行っている公共図書館を 10 館抽出し、それらで提供されている電子書籍、印刷体書籍をランダムに抽出し、amazon.co.jp の Amazon 売れ筋ランキングにおける順位を調べ、比較した。この調査でも、NDC の分類別に結果を出した。その結果、電子体、印刷体ともに、売れ筋ランキングが高い書籍の方が、そうではない書籍よりも、公共図書館において多く所蔵されていることが分かった。このことは、公共図書館の所蔵では、より利用者のニーズを汲み取りやすい書籍を収集する傾向があるということを示している。さらにその傾向は、印刷体の方が強かった。

電子書籍貸出サービスの導入には、提供できるコンテンツ数が少ないことや、コストが高いことなどの懸念点が挙げられているが、電子書籍に対する需要が増加を続けており、将来的に電子書籍貸出サービスの導入は図書館利用者のニーズを汲み取るという意味でも重要となってくるだろう。その際、利用者のニーズに合わせた書籍を収集することが、利用者の継続的な電子書籍貸出サービス利用を促進することが期待される。

(指導教員 辻慶太)